

要である。なぜなら、人間は回心によって神を目指さない限り、たとえ神に向かって造られているとしても、神から離れてゆく存在として、理解されているからである。このような人間理解が、「罪のしるしを身に帯びた人間」と語らせているのである。神から離れてゆく人間に、回心を迫り、神へと向かわせるのは、人間の意志ではない。神の愛である。偽りの休息に休らおうとする人間を、偽りの休息から追い立てる *excitare*³⁾ 神の愛が促す意志決定は、神から離れてゆく存在である人間にとって、自覚的な意志決定以外ではありえない。アウグスティヌスは、このような明確に自覚された意志にもとづいて神を呼び求めようとしている。 *fecisti nos ad te* と言われるときの *ad* と、神に向かいあるいは神から離れる「双方向性」の中での *ad* とを、区別することなく同列に論じることにはできないように思われる。

註

- 1) Augustine, *Confessions II*, Commentary on Books 1-7, J. J. O'Donnell, Oxford, 1992, p.17.
- 2) 何らかの方向性をもった運動を表す動詞とともに用いられている *ad* は、その方向性を明示する働きをしていると解釈できる。『ソリロキア』I,1,5-6 の *ad* はすべてこの用例である。しかし、*fecisti nos ad te* という文にはそのような動詞が用いられていない。少なくとも *facere* の通常の意味にそのような方向性を読みとることは困難である。それゆえ、この *ad* の解釈が問題になるのである。
- 3) *excitare* の第一義的な意味は *Oxford Latin Dictionary* によれば、To cause to move (from a position of rest) である。とすれば、この基本的語義において、何らかの休息の場から *ex* 追い立てるというニュアンスは含まれていることになる。たとえば、*Conf. X, 3, 4.* に *confessiones praeteritorum malorum meorum... excitant cor, ne dormiat in desperatione* という用例がある。

* * *

討論報告（司会者）

宮谷 宣史

学会における研究発表のさい、司会の役を果たした私に、何か書くようにとの依頼を受けた。当日、荒井洋一氏のよく用意された研究発表と、それに対する中川純男氏の

行き届いたコメントがなされ、また、質疑応答も活発に行われたので、司会者の務めは終了しているはずである。特に、研究発表に対して、わざわざコメントが準備され、研究内容についての単なる質問ではなされないほどの突っ込んだ意見が表明され、興味深い展開をみる事ができたので、司会者としては満足しているため、それ以上改めてコメントを付け加えるのは、蛇足であり、また、役割を逸脱しているとも思える。そこで、正直なところ何を書くべきか、迷わざるを得ない。しかし、司会者として、改めて何か書くとすれば、同じ『告白録』の研究に携わるものとして、荒井氏の研究発表に関していささか質問のような意見を述べることは出来るであろう。ただ、発表の内容に関しては、中川氏の洞察に富む優れたコメントがすでになされているので、それとは少し立場を変えて、率直な感想じみた意見を断片的に記すに止めたい。

アウグスティヌス『告白録』の冒頭部分に関して、荒井氏がテキストに即し、また、内外の諸研究を参照にしながら、自らの解釈を展開されようとしている姿勢は評価できる。ただ、この箇所のテキストおよびその解釈にさいして重要な点を挙げておられながら、その問題点を十分に把握し、それを検討されていない面があるとの印象をうけた。

たとえば、指摘の通り、主語の移り変りがみられるが、それが何故なのか、そこで何が意図されているのかが、十分問われてもいないし、明確にされてもいない。2人称 *tu* で語りかけながら、*homo* という3人称が用いられているのは何故か。また、このさいの *tu* と *homo* の内的関係はどうなっているのか。そしてそれが、やがて、1人称の複数形から1人称の単数に変わっていくのは何故か。表現と内的な意味の関連性がテキストから十分に読み取れるはずである。この基本的な検討をなさず、深層意思と選択意思という表現を用いたり、また、『独白』からの引用を行ったりするのは、方法的にも内容的にも問題といわざるを得ない。

この箇所の従来の研究で見落とされている大切な言葉は、文字どおり冒頭におかれている *magnus* である。2回繰り返されて用いられている。荒井氏も取り上げていない。それでいいのであろうか。*tu* が何ものかをアウグスティヌスは、*magnus* という言葉で表わしている。神への呼びかけとしては、本書中、さまざまな表現が使われているが、最初の言葉として選ばれたのは、*magnus* である。この言葉をてがかりに、アウグスティヌスの深層意思が探れないであろうか。結論において、本書を、神への呼びかけとみなすならば、この語によって著者は呼びかけを始めている点を見逃す

ことは、いかがなものであろうか。

amare と ad の意味, invocare と laudare の意味を問うことは大切である。しかし、その前に excitare に注目しないのは、何故であろうか。この語こそ、この箇所
の構造と内容、上記の言葉の意味等を理解するための鍵と言えるのではなからうか。
excitare の意味が問われなければ、invocare その他の言葉の内容は理解しがたいの
ではなからうか。

荒井氏による, invocans, credens という現在分詞の解釈は興味深いですが、しかし、
この両方に前後関係をみるのではなくて、この両者がまさにいつも同時であり続ける
ことが、アウグスティヌスの思想ないしは態度の特色である。このことを荒井氏自身
も引用している『告白録』の最後の文章がしめしているのである。

この箇所の構造とその内容を扱う場合、信の系列、知の系列と分けて論ずるにして
も、その議論が後半部分に片寄りすぎる問題がある。そこで1章全体を捉える視点と
して、敢えて図式的な方法を選ぶとすれば、私は、加藤信朗氏の分類の仕方にならない、
つまり、宗教の次元、神学の次元、哲学的な反省の次元と3つに分けて考察を試みる
ことは、有効であると思う。

ないものねだりのような感想になってしまったが、この意欲的な論文をきっかけに、
『告白録』の学問的な研究がわが国でますます盛んになることを期待したい。